

入選

『奇跡のような幸運』

道産子

携帯電話からの警報音が響いたのだろうか、異様な雰囲気目覚めた。次の瞬間、経験したことのない激しい揺れが襲ってきた。横で寝ていた妻が私の名前を必死の声で叫んだ。初めて経験する強い地震だった。倒れる危険性のあるタンスから身を離し、妻と抱き合って揺れに耐えた。立て続けにモノが割れる音が派手に響き、なおいっそう恐怖感に襲われる。窓ガラスが割れたのだと思った。そして、次には家が潰れてしまうのではと恐ろしくなった。

北海道胆振東部地震が起こった時、私は寝室で妻と一緒にいた。これは私たちにとっては珍しいことだ。やむを得ない事情があって、私たち夫婦は1年のうち11か月を離れて暮らしている。インドネシア人の妻は幼稚園を経営しているのでジャカルタに独りで暮らし、毎年ひと月だけ北海道で過ごす。だから8月から9月にかけての1ヵ月だけ私たちは夫婦として一緒に暮らすことになる。そんな楽しいひと月のはずが、今年は経験したことのない大地震に襲われてしまった。

妻はかなりのショックを受けていた。ほんの1か月ほど前、インドネシアのロンボク島で大きな地震があり、数百人が命を落としていた。その大半が家屋や建物が崩れて、その下敷きになった人々だった。インドネシアの家屋はレンガを積み上げて建てる。専門家によると「レンガ積みは耐震性が全く無く地震で揺らされれば一気に崩壊する。そして瓦礫に埋まって多くの人々が亡くなる」そうだ。崩れたレンガ家屋の瓦礫を映像で何度も見ていた妻は、日本でも強い地震が起こると家屋がすぐに倒れてしまうと恐怖感に襲われていたようだ。

「家が崩れると思って怖かった。そうなったら命も助からないと覚悟した。でも、あれだけの強い地震だったのに、この木造の家は傾くこともなかった。揺れに強いように建てられているのね」と妻は感心していた。

レンガ積みよりも木造住宅のほうが耐震性がある、と日本人なら誰でも考えるだろう。地震の多い日本では耐震木造住宅が設計されるのは当然だ。我が家は築三十年以上経つが、震度6の地震にも崩れなかったどころか、傾くこともなかった。まったくの無傷のままだった。窓ガラスが割れたと思った派手な音は、食器棚から飛び出した皿やコップが割れる音だった。

さらに調べてみると、外壁にモルタルを塗ることによって強度が増すという。モルタル外壁の家は地震により強いということになる。しかも、火災にも暴風雨にも強いという。

ちなみにインドネシアでもモルタルはよく使われる。素焼きのレンガをモルタルで付けながら積む。レンガを積まずに空けておいた開口部に木製のドア枠と窓枠をはめて、その枠とレンガの間の隙間をモルタルで埋める。さらに、積みあがったレンガ壁の両面からモルタルを塗って、その上にペンキで色を塗る。それが一般的なインドネシアの建築方法だ。

ただ、この方法には幾つか問題点があると専門家は指摘している。

まず、モルタル外壁なので鉄筋コンクリート造りのように強く見えるけれども、実際には中身は脆いレンガである。外見にだまされて現実の弱さを気かけなくさえる。さらに、モルタルをくっ付けて使うような使い方をすれば、木枠も弱くなる。木材が弱いのではなく使い方が間違えている、と。

揺れが治まったあと、割れた食器などが散乱した居間を通過して、ひとまず家の外に避難した。半袖では肌寒さを感じる夜だった。余震が怖いので外で待機していると、あたり一帯の灯りがいっせいに消えてしまった。北海道全域が停電するという未曾有の事態が起こったのだ。

星明りだけになった。心細さを感じながらも、見上げた星空がきれいだったのが印象に残っている。人工の照明がいっさい無ければ、これほどたくさんの星が見えるのかと感動すらした。余震が怖いので外に出ていた私と妻は、玄関前に腰かけて美しい夜空を眺めながら、おたがいを励ますように話をした。

命を落とした人たちには冥福を祈り、被害に遭った人たちにはお見舞いの気持ちを伝え、早急な復興を祈るのはもちろんのことだ。そんななかで私たちは自分たちの幸運を感謝した。二人とも小さな怪我すらせずすんだ。春に独り立ちしたばかりの私たちの子どもも無事だった。

そうやって感謝できるのも命あってのことだ。地震から守ってくれた家には特に感謝したかった。妻は日本の耐震木造住宅に感心していた。インドネシアも地震が多い国なのだから、根本的に建築方法を考え直すべきだと痛感していた。モルタルを塗って外見だけを強く見せるのではなく、正しい方法でモルタル外壁にするべきことも後から学んだ。地震は怖かったけれども、日本の技術の優秀さを証明出来て、日本人として誇らしい気持ちにもなった。

私たちは最後にもうひとつのことに感謝した。それは夫婦二人で同じ体験ができたことだ。地震という恐ろしい体験ではあったが、その場に一緒にいられたことへの感謝だった。夫婦である以上は喜びも悲しみも二人そろって感じたいものだ。たとえ辛いことでも夫婦がそろって体験すれば、たがいに力を合わせて頑張ろうという気が起こっている。1年に1ヵ月だけ一緒に暮らせる私たちが生まれて初めて経験する大地震とその後を一緒に過ごせたのは奇跡のような幸運だった。

「だいじょうぶ。世界が終わるわけではないのだから」

そんな妻の口癖を間近に聞いたのは、このうえもなく幸福だった。